

〈活動の原則〉

何をするにも対等な関係、対等な関係でないとお互いが長続きしない。

〈やり方の工夫〉

「あなたたちが来てくれて、利用料300円を支払ってくれるから活動が成り立っている」と伝えている。

研修1-①

〈活動の原則〉

多様な人が出入りする空間ができると、役割づくりに結びつく。

〈やり方の工夫〉

運動会やまつり、買い物支援などのプログラムの組み合わせの結果として、多様な人が出入りする。

研修1-②

〈活動の原則〉

地域のお宝情報はひとり占めせず山分けする。活動に失敗したら、助けてもらいいっしょにやり直す。

〈やり方の工夫〉

活動はひとりでやらないで、地域や職場の仲間と絶えず情報共有する。

研修1-③

〈活動の原則〉

参加費負担の軽減など、地域で考える機会を作ることが、包摂性にむすびつく。

〈やり方の工夫〉

事業の参加費を無料にするという一律の行政判断よりも、地域での判断を促す。

研修1-④

〈活動の原則〉

「やらされ感」から「わくわく感」に転換するには、三方よしの経営感覚が必要となる。

〈やり方の工夫〉

地域住民、地域づくりの担い手、行政のそれぞれにメリットある活動を生み出す。

研修1-⑤

〈活動の原則〉

「誰かがやるもの」の発想から「誰もがやるもの」への転換を図る。

〈やり方の工夫〉

民生委員が担ってきた見守りを、地域組織のアクションプログラムとする。

研修1-⑥

〈活動の原則〉

活動のモチベーションは、活動が見える形にして、地域の人から評価されることで得られる。

〈やり方の工夫〉

地域外に住む出身者や子どもたちから「見たよ」の発信につながる、一人ひとりの活躍を見せるようにする。

研修1-⑦

〈活動の原則〉

住民の主体性を信じ、「〇〇してみたら」の提案型の仕掛けは避けている。

〈自分なりの確信〉

地域の課題を発信してくれた住民の思いを形にするために、自分の存在があるからこそ、側面的な支援を行う。

研修2-①

〈活動の原則〉

多様な活動のなかで文化活動（例えば、子どもエイサー）は、地域の世代継承に不可欠な活動といえる。

〈自分なりの確信〉

文化活動を重視することで、若い世代の参加者が、活動の表舞台に出ることが可能となる。

研修2-②

〈活動の振り返り〉

住み続けたい地域にむけて、活動が続けてきた。達成感としては6割くらい。

〈自分なりの確信〉

愛おしいという気持ちで、地域を考えるから続けられた。

研修2-③

〈活動の原則〉

毎日、住民と勝負している気持ちを持ち続ける。

〈自分なりの確信〉

個別支援では再度チャレンジできる機会があるが、対地域はそうはいかない。嫌われたらおしまい。

研修2-④

〈活動の原則〉

従来からの停滞している地域活動メニューの再生が、リーダーの役割。

〈自分なりの確信〉

行政を説得し、活動資金の獲得を目指す小商いへの着手によって、サロンの再生は可能となる。

研修2-⑤

〈活動の原則〉

自らが地域社会の一員であり、地域づくりの担い手であることを自覚する。

〈自分なりの確信〉

支援にとどまらず、地域に愛着を持ち、進んで地域づくり活動そのものに参加する。

研修2-⑥

〈活動の原則〉

制度の形を最初から行政の感覚で押し付けると、地域の独自性を失わせることになる。

〈自分なりの確信〉

地域は生き物なので、年度単位で目に見える成果や平準化を求めない。

研修2-⑦

〈活動の着想〉

サロンの発想は、お寺がベースである。

〈自分なりの確信〉

あられを炒って食べながらおしゃべりをしていた。そんな風景が求める居場所のイメージ。

研修3-①

〈活動の振り返り〉

自分がしてきたことは、すべて「つながりづくり」だった。

〈自分なりの確信〉

当初は行政や自治委員から「限られた相手を対象とした活動」と言われ続けたが、前に進めることで拡がりが確保できた。

研修3-②

〈活動の原則〉

包括支援センターの専門性を活かしつつも、ふつうの人間の付き合いで接する。

〈やり方の工夫〉

日々の積み重ねで関係を築き、「そろそろこんなお願いをしてもいいかな」と距離をはかる。

研修3-③

〈活動の原則〉

住民のペースにあわせて、つながり続ける・つながり続ける。

〈やり方の工夫〉

通い場活動に訪問したときに、必ず次回に伺う段取りをつける。

研修3-④

〈活動の原則〉

集落によって、「難しいこと・できていること」はさまざま。地域力に応じて事業を組み立てる。

〈やり方の工夫〉

回覧板を回せない地域、班長を決められないなど、地域を知るマップづくりでわかった。

研修3-⑤

〈活動の原則〉

困り感からの出発ではなく、やったら楽しそうな事業を創造することも行政の役割。

〈やり方の工夫〉

エンタメと福祉を組み合わせた企画を地域発に求める柔軟性を持つ。

研修3-⑥

〈活動の原則〉

孤立させない支え合いの地域づくりはお互いが楽しむ居場所づくりから始まる。

〈やり方の工夫〉

どのような活動のなかでも、「おしゃべり」の時間を用意することで、持続性が増す。

研修3-⑦

〈活動の原則〉

従来からの停滞している地域活動メニューの再生が、リーダーの役割。

〈やり方の工夫〉

行政を説得し、活動資金の獲得を目指す小商いへの着手によって、サロンの再生にも成功している。

研修3-⑧

〈活動の原則〉

これから頑張らないといけない活動を優先するといった順位づけを行う。

〈自分なりの確信〉

ニーズ調査の満足度の高い項目は、ちょっと手を抜く。十分に頑張ってきたから。

研修3-⑨

〈活動の着想〉

住む地域の魅力に気づいていない。誇りを持ってもらえる活動を起こす。

〈やり方の工夫〉

その地域だからの特産品に光を当てていくことが地域づくりの第一歩。

研修3-⑩

〈活動の着想〉

行政や専門職の地域カフェの取組みには、介護者への関心が高く、認知症高齢者本人に居場所がなくなる傾向にある。

〈やり方の工夫〉

本人が好きなことができる小さなカフェが必要で、自宅開放のカフェを選択。

研修4-①

〈活動の振り返り〉

拠点の居場所まで来れなくなった人が生まれたので、身近な班での居場所づくりを実施した。

〈自分なりの確信〉

ひとりぐらしの人がどこの部屋で寝ているかなどがわかる関係を目指す。

研修4-②

〈活動の振り返り〉

自分たちの老後を考えた地域づくり、情報提供、身の丈に合った活動を実践。

〈自分なりの確信〉

ボランティア仲間も活動ができなくなったら寂しく心細い。活動していない人は常に心細さを感じている。

研修4-③

〈活動の原則〉

大きなイベントでは、小さな声は聞き取れない。大きな組織になってしまうと既存の組織と変わらない。

〈やり方の工夫〉

2.8平方kmの小さな地域だから活動ができた。

研修4-④

〈活動の着想〉

地域担当コーディネーターから
だされた課題を受け、公民館を
多機能化させる。

〈やり方の工夫〉

公民館を商店街に変化させ、
団地の集会所をサテライトのカ
フェにすることで、より地域が
見える。

研修4-⑤

〈活動の原則〉

地域に専門職の支援を開くため
の前線部隊としての活動を担
う。

〈やり方の工夫〉

地域ベースでの情報交換会や声
掛け活動のなかで、守秘義務の
壁を乗り越える。

研修4-⑥

〈活動の原則〉

まるごとの活動には、つなぎ役
だけでなく、相互理解や合意形
成の促進を強化する。

〈やり方の工夫〉

地域活動団体やボランティア団
体についての広報や情報共有の
仕組みづくりを進める。

研修4-⑦

〈活動の原則〉

話し合いによって地域づくりを
考えるが、実行するには暮らし
たいニーズに根差したプランが
必要となる。

〈やり方の工夫〉

プランがないと情報に振り回さ
れ、つまずくと停滞を招いてし
まう。

研修4-⑧

〈活動の原則〉

青年団などがなくなるなかで、未婚男性の今後の孤立への対応が重要。

〈やり方の工夫〉

公民館の協力を得て、朝市に出店してもらうなどの地域の関わりをつくる。

研修4-⑨

〈活動の原則〉

多文化共生の活動のなかで取り組む課題解決には、文化交流をこえる支援の拡がり・連携が不可欠となる。

〈自分なりの確信〉

外国人市民が抱える生活困窮の解決も活動の守備範囲とする。

研修4-⑩

〈活動の原則〉

直接相談を受けることだけではない、小さな声を拾い上げてくれる人を地域にたくさんつくる。

〈やり方の工夫〉

ご近所さんやボランティアのメンバーのアンテナにたよる。

研修5-①

〈活動の着想〉

地域活動のなかで文化活動（子どもエイサーなど）の取り組みは、参加者が表舞台に出ることを可能にする。

〈自分なりの確信〉

地域活動の世代継承を意識した取り組みの継続が重要である。

研修5-②

〈活動の原則〉

行政研修ではなく、住民レベルでの研修機能が、地域組織の基盤をつくる。

〈やり方の工夫〉

各々の人材が持っている資源を循環させる仕組みとして研修を実施する。

研修5-③

〈活動の原則〉

人材育成は、事業をこなすなかで経験を通して実現する。

〈やり方の工夫〉

主体性の確保のためにプロセスを大事にするなかで、人材は育つ。

研修5-④

〈活動の着想〉

情報通の住民から持ち込まれる情報や課題への柔軟な対応が自分を成長させる。

〈活動の着想〉

単独の優れた活動より、他の活動との足し算・掛け算を選ぶ。

研修5-⑤

〈活動の原則〉

職場全体で生活支援コーディネーター業務を理解し、コーディネーターの孤立を防ぐ。

〈やり方の工夫〉

コーディネーターに任命されていない職員にも、養成研修の受講を促す。

研修5-⑥

〈活動の原則〉

地域づくりに向けた事業を担える職員を育成するためには、職員を地域に解き放すことが不可欠である。

〈自分なりの確信〉

地域でのやり取りの蓄積、事案の積み重ねは、地域のなかで学ぶしかない。

研修5-⑦

〈活動の原則〉

地域づくりを考える問いを自ら立てることができ、地域から問われることを苦にしない。

〈自分なりの確信〉

その場をしのぐことなく、深めるという、より高い目的を意識する。

研修5-⑧

〈活動の着想〉

行政や専門職の地域カフェの取組みには、介護者への関心が高く、認知症高齢者本人に居場所がなくなる傾向にある。

〈やり方の工夫〉

本人が好きなことができる小さなカフェが必要で、自宅開放のカフェを選択。

研修6-①

〈活動の着想〉

地域の一人ひとりが貴重な人財、みんなが大事な活動員である。

〈やり方の工夫〉

地域の「きらっとさん」を見つけるために、用事がなくても老人会やサロンなどに行く。

研修6-②

〈活動の原則〉

困り感からの出発ではなく、やったら楽しそうな事業を創造することも行政の役割。

〈やり方の工夫〉

エンタメと福祉を組み合わせた企画を地域発に求める柔軟性が大切である。

研修6-③